

第17回 歌う側から作り手側への 決意を固めた一曲

グループサウンズ花盛りの昭和42年、時に平尾昌章、29歳。ロカビリー時代の同志ミックキー・カーチスをはじめ、ジャッキー吉川、田辺昭知、かまやつひろし(皆、平尾の1学年下)が現役バリバリで突っ走っているのを傍観しているのはつらかったでしょうが、この年、布施明という「ひとりGS」を支える作曲家として頭角を現わし、GS以後は昭和という時代が終わるまで、アイドル歌謡から「必殺シリーズ」の主題歌まで、老若男女を問わず、私たちを楽しませてくれました。

歌い手側から作り手側への転身の契機となったのは、布施明の存在でした。

昭和36年に発売した『おもいで』という自作曲のバラードが、5年後の昭和41年、思いがけず北海道から人気が出始めた矢先、同じキングレコード所属の布施明に同曲をカバーさせてほしいとのレコード会社からの要望を受け入れ、スター復活への夢を10歳年少だった18歳の布施に託

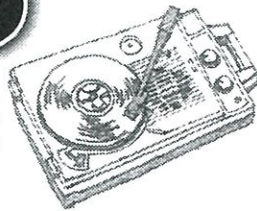
すことにします。

作曲・平尾、作詞・水島哲、編曲・森岡賢一郎のトリオは『おもいで』

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦



『銀の涙』に続く布施への第3弾として、同41年末に『霧の摩周湖』を提供。これが決定打となり、それぞれ作曲家と歌手の王道を歩むことになりました。

聴く人の胸にこれでもかと訴えかける布施の歌声は実にドラマチックであり、それまでの歌謡曲のしきたりに大砲を打ち込むほどの衝撃がありました。こうした絶叫唱法を歌謡曲に持ち込んだのも、平尾の功績でしょう。

『霧の摩周湖』は平尾自身でも吹き込んでいたので、布施との聴き比べができます。ユーチューブで見られるテレビ画像よりも、オリジナル盤の音源で比べたほうが楽しめます。

歌唱力・表現力ともに甲乙付けがたいのですが、譜面には細かい装飾音や喉の絞め具合、息継ぎのスタイルなど、平尾盤では彼が好んでとりあげて歌っていたポール・アンカの影響が感じられます。絶叫部分やメロディーの原型として、『クレイジー・ラブ』や『君はわが運命』あたりが無意識のうちにあったのかもしれない。

布施のほうはロカビリーというよりも、彼が大好きだったイタリアのカンツォーネ風の歌唱で、『サンライト・ツイスト』や『貴方にひざまづいて』で知られるジャンニ・モランディの顔が浮かんできます。でも、モランディは当時、「イタリアのポール・アンカ」と称されていたそうですから、これはこれで平尾も納得したことでしょう。

この名曲が、平尾にとっても布施にとっても進むべき道標となった重要な1曲であることは、お互いに承知していたはず。

去る10月30日に催された平尾の告别式で、布施は祭壇の前でこの曲を故人に捧げ、平尾は生前、『霧の摩周湖』を最後に、レコードジャケットの表記を「昌章」から「昌晃」に改めました。